すみだ地域学情報 We!

第21号
2012年
（平成24年）
7月発行

発行：墨田区教育委員会（生涯学習課）
〒130-8640 墨田区吾妻橋一丁目23番20号
☎ 03-5608-6309 FAX 03-5608-6411 ✉ syougaigakus@city.sumida.lg.jp

ふれあい活力 ゆとり
すみだ

墨田区役所1階　展示コーナー

本所を歩く（その2）

－吾妻橋地域を中心に－

5月22日に東京スカイツリー®も開業し、業平橋駅改めとうきょうスカイツリー駅周辺は人であふれる日が続いていますが、程近い墨田区役所内に江戸以来の歴史を感じ取れる場所があるのはご存知でしょうか。今回は区役所を中心に、墨田区と縁の深い人物を追いかけていきます。

江戸時代、隅田川には五つしか橋が架けられていませんでしたが、そのなかでも区役所近くに架かる吾妻橋は一番最後に架橋されました。安永3年（1774）のこととつたえられますので、時は十代将軍徳川家治の治世。あの田沼意次（たぬまおきつぐ）が政権の座に就いていた頃です。江戸の頃、吾妻橋は大川橋と呼ばれました。

吾妻橋が架けられたことで、本所そして向島への行き来は格段に良くなり、その賑わいにも拍車がかかります。現在、橋のたもとには、墨田区観光協会が運営する吾妻橋観光案内所がありますので、立ち寄って墨田区の観光情報をあつめていきましょう。

観光案内所の近くにある墨田区役所のたつ辺りは、江戸時代に沼津藩水野家や秋田藩佐竹家などの屋敷地でしたが、邸内の庭園は名園として知られていました。文政5年（1822）に沼津藩主水野忠成が造園しましたが、佐竹家の屋敷地になると浩養園（こうようえん）・佐竹の庭として有名になります。

残念ながら江戸の大名庭園としての由緒を持つ浩養園は残っていませんが、区役所内部に入ると江戸以来の歴史を感じ取れる場所が残されています。玄関近くにある展示コーナーです。

展示コーナーには、墨田区で生まれた勝海舟や葛飾北斎たちに関する資料が数多く展示されています。海舟は青年期まで墨田区で過ごしますが、何と言っても咸臨丸（かんりんまる）の艦長としての顔が有名でしょう。その模型が展示されています。江戸城無血開城の立役者でもありますが、その時の絵もかざられています。

北斎は生涯の大半を墨田区内で過ごしました。言うまでもなく世界的に有名な浮世絵師ですが、やがて北斎の浮世絵を集めた「すみだ北斎美術館」（平成27年度開館予定）が区内に建設されます。墨田区の新しい名所になることでしょう。

そのほか、墨田区の伝統工芸を紹介したパネル展示も有ります。

ホームラン世界一の記録保持者で墨田区の名誉区民の王貞治氏のパネルも展示されています。

展示コーナー近くのアトリウムには、東京スカイツリーの模型が置かれています。

このように区役所内部を歩くだけで墨田区の今と昔が感じ取れるわけです。

建物の外に出てみましょう。

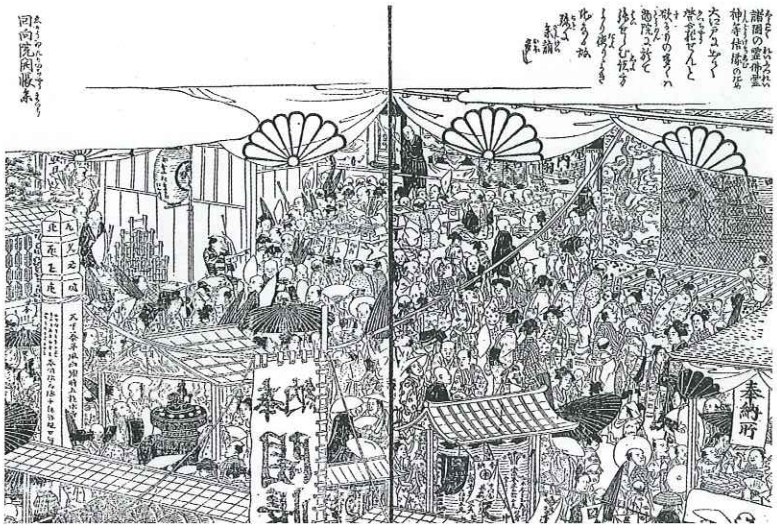
隅田川に面する広場に、展示コーナーでも取り上げられていましたが、墨田区で生まれた偉人の銅像が立っています。江戸っ子の代表格でもある勝海舟の銅像です。江戸に幕府が開かれてから四百年目にあたる平成15年（2003）に建立されました。

東京スカイツリーと隅田川に挟まる形で、吾妻橋近くに立つ墨田区役所には墨田区の歴史が詰まっているのです。

勝海舟の銅像
〈墨田区役所うるおい広場〉

（歴史家　安藤　優一郎）

回向院と江戸の開帳

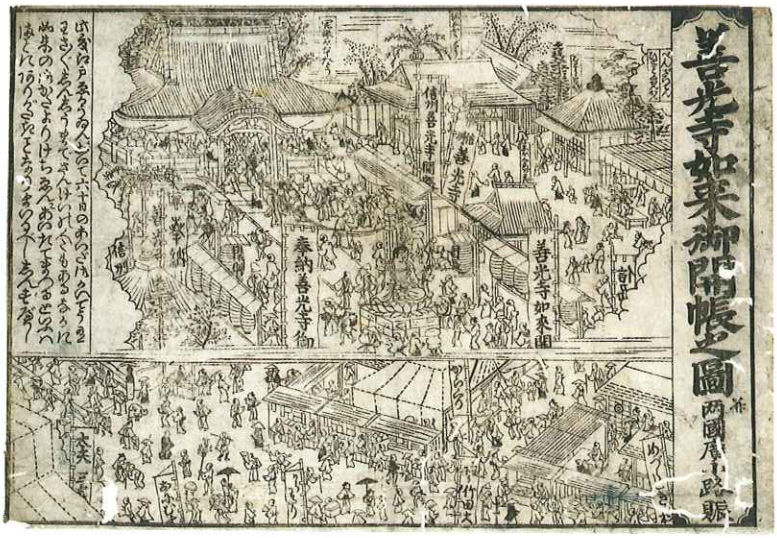


江戸名所図会より「回向院開帳参り」〈個人所蔵〉

江戸の三大大火のひとつ、明暦の大火、通称「振袖火事」が明暦3（1657）年に起こって10万人を超える江戸市民が犠牲になりました。このとき亡くなった身元不明の人々を葬り、万人塚という墳墓をつくって念仏をあげる御堂を建てたのが両国にある諸宗山無縁寺回向院の始まりです。現在の回向院は、鼠小僧次郎吉の墓や相撲に所縁の力塚、ペットのお寺などで有名ですが、戯作者山東京伝や歌舞伎役者の元祖猿若勘三郎などの墓や六大浮世絵師の一人鳥居清長の菩提寺としても知られています。回向院で行われていた勧進相撲は、天保4（1833）年に年2回行われる定場所となり、現在の大相撲へと継がれていきます。そして回向院で最も盛んだったのが、その地の利を生かした出開帳でした。

開帳は、普段観ることのできない秘仏を一定期間信者にその扉を開いて仏と縁を結ばせる宗教行事として始められましたが、次第に信者たちの奉納金品や賽銭を目当てに行われるようになりました。開帳には開帳仏を自らの寺社でみせる居開帳と他の寺社に出向き開帳場所を借りて行う出開帳があります。江戸で行われた開帳の記録では、承応3（1654）年から明治元（1868）年までに1565回行われ、このうち居開帳は824回、出開帳は741回行われています。なかでも出開帳は回向院を会場としたのが最も多く166件で、次に多かった深川永代寺の56件をみると回向院が出開帳のメッカだったといえます。なぜこれほどの数の出開帳が行われ、その場所が回向院に集中したのでしょうか。それはまず、遠方から出てくる寺社側の事情があります。木造建築は風化で破損したり、火災で焼失するなどで改築や修理が必要でした。寺社は御堂などの建造物を維持するためには経常の運営費で賄うことが難しかったようです。幕府から金品の給貸与を受けられる場合もありますが、多くは、権化（勧進ともいう、募金を集めること）や開帳の認可を受けて実施し、資金調達をしていました。次に、回向院の立地特性です。明暦の大火がきっかけとなって隅田川に両国橋が架けられ、本所の開拓が行われます。当時、両国橋を今の中央区側から渡ると真正面に正門があり多くの参拝客が訪れました。東西の広小路には飲食などの店ができ、見世物小屋が建ちました。幾世餅、泡雪豆腐などの両国名物が生まれ、ギヤマン細工大燈籠、植竹藤五郎のかご細工といった見世物が人気を博しました。両国は浅草と並ぶ繁華街となり、回向院を中心に大いに栄えたのです。回向院で出開帳をやれば必ずと言っていいほど人が集まり、経済的に成り立ったわけです。回向院で出開帳を行った寺社の記録では、成田山新勝寺が最も多く、京都清涼寺、長野善光寺などが名を連ねています。回向院では来年（平成25年）春、長野善光寺の出開帳が復活します。江戸の時代に思いを馳せてみてはいかがでしょうか。

（墨田区職員　高野　祐次）



「善光寺如来御開帳之図－両国広小路賑」〈個人所蔵〉